

するもの二萬一千人なりとぞ、戸塚鎌倉の邊、小田原死人限りなし、翌日より日中五十度三十度十日餘りほどゆり、春に至て五三日一度、又は三四度づ、大ゆりに動き、少づ、は繁々にありて、半年餘りにして止め、

〔續地震雜纂大日本地震史料所載〕伊勢南島古和浦津浪之事

十一月元○安政四日、五ツ時過、沖を歸り來る漁船、古和浦口前處兼て運上を取之前、魚を積並べ、直

段を付け居る處へ、大地震に付、各居宅へ走り歸らむとするやいなや、大地を泥を吹出し、沖を山の如き大浪來り、人家之屋根之上を越江、一圓海中に相成、諸人山へ登り、これを避く、尤去る六月十四日地震之時も、津浪を恐れ、諸人山に登り、七八日も山住居致し候故、此度も地震の初めより、誰教ふるとなく、子供より騒ぎ立ち山に登りし故、如斯之天津波にも死人少く、至神の御加護と難有存じ候よし、

一浪引し跡は、泥并砂を打上げ、又は波除け堤崩れ、家はさら也、屋敷地迄も跡形なくなり、又家は海岸の樹木にかゝり、とまりたるもありたるよし、

右は古和浦平三郎といふ者、村之代參に取あえず、兩宮江參宮致し、浦の御師中西與太夫へ立寄り話したる趣也、○下

〔續地震雜纂大日本地震史料所載〕霜月元○安政十三日出、憂北生、伊豆下田之書狀、同月廿九日著

扱當月四日朝五ツ二分五厘許の頃、當下田湊大地震、土藏等は壁落、土地少々割れ申候、泥少々出候位之事に御座候、市中大騒動仕居候處、一刻許も過候間に、大勢又々騒ぎ立候間、出火と存じ、表に出申候處、煙も不見候間、是は定而、異人共亂妨仕候事と存じ、我も内も脇差を取に入出候處、早市中に大波參り申候、大工町川岸に大船之帆柱搖動致し、あたまの上倒れ候許に相成候間、漸津浪なる事をしりて、先山際へ上り、旅宿本覺寺へ行んと存候に、市中一面津浪に而、中々渡りがた